

# 子どもが「遊ぶ」経験を問う

横井 紘子

「『遊び』って何だろう」「幼児教育における『遊び』の意義って何だろう」―これらの「遊び」にまつわる命題は、常に私を魅了し、同時に私を悩まし続けている。

私は週に一回、都内のある幼稚園にフィールドワークに入らせていただいております、そこで直接的に子どもとかかわることも多い。この活動は今年で四年目を迎えた。私は実際の保育現場において、子どももの「遊び」を見、子どもと共に「遊び」、時には「遊び」を

提案したり、助言したりもしている。しかし、「遊び」とは何か、「遊び」の意義とは何か、そう自分に問うた途端、明確に捉えていたはずの事象が急に輪郭を失い、ぼやけてくる。私は不安になる。果たして、私が見ていた子どもは本当に「遊んで」いたのだろうか。私の行為によって「遊び」が壊れはしなかっただろうか。快活で楽しかったはずの「遊び」が、突如得体の知れない、どこか不気味なものになってしまう。「遊び」とは何か。幼児教育における「遊び」の意義

とは何か。この大きな命題は、一朝一夕で解決できるような代物ではない。この「遊び」というモンスターを私は解体することができるのだろうか。まだまだ勉強中の身であり、「遊び」という事象に対峙するだけで今は精一杯なのであるが、ここで今現在私の「遊び」への視点をいくつかまとめさせていただきたい。未だに様々な視点が絡まって整理されておらず、考察までには至っていないが、その点のご容赦いただきたい。

### 「幼児教育における『遊び』」とは

子どもの「遊び」はわれわれにとって魅力的なものである。生命力に満ち溢れた子どもの「遊び」は、見る者を惹きつける力をもっている。さらに、「遊び」のダイナミックな意表をつかれる展開にわれわれはしばしば驚かされる。

しかし、「遊び」とは、身体を大きく動かし、様々な道具や空間をいっばいに使っている活動に限定されるのであるだろうか。「遊び」とは、継続して大きな展開

を繰り返す活動に限定されるのであろうか。

ここに、「幼児教育における『遊び』」という言葉の裏に潜む、「遊び」に対する前反省的な教育的理念が見え隠れしているように思われる。

「遊び」が子どもの心身発達の基礎となる重要な経験であることは、幼児教育においては自明のことである。しかし、逆にいえば、幼児教育においては、子どもの心身発達の基礎となる重要な経験（大人にとって教育的価値が付与され、重要であると見做される経験）としての「遊び」のみが価値付けられ、その教育的な意義が認められているのではないか。

つまり、望ましい経験（教育的な価値が与えられる経験）とされる「遊び」のみが正当な「幼児教育における『遊び』」として認められ、望ましくない経験（教育的な価値が与えられない経験）は、保育実践の場において日常のいたるところに見受けられるにもかかわらず、特に研究において、意識的・無意識的に排除されているように思う。

ここで、「遊び」が「望ましい『遊び』」と「望ましくない『遊び』」という二つに区分されてしまったことになる。しかし、この



「望ましい『遊び』」と「望ま

しくない『遊び』」の線引きには一般的な定義があるわけではないだろう。当然、子どもの安全管理の視点から、大きな怪我や事故につながるような「遊び」は、子どもにかかわる大人ほぼ全員が「望ましくない『遊び』」というネガティブ・ラベルを付与することが予想される。しかし、そもそも根本的な認識の問題として、子どものいかなる活動を「遊び」として捉えうるかについても様々な議論がある中、さらに、「遊び」であると認識された活動に、ネガティブ・ラベルを貼るのかポジティブ・ラベルを貼るのかは、それぞれの園の方針や、実践場面の文脈、保育者・研究者等個人によって異なり、一概に区分することはできないだろう。

保育実践について考えてみれば、保育者は、園の方針や個人の経験、一般的な教育理念などに裏打ちされた、「認識の枠組み」と呼べるような一種のフィルターを用いて子どもの「遊び」を捉えていると思われる。その保育者もっているフィルターが一人ひとり異なっているために、客観的に見れば同様の事象として捉えうるような子どもの「遊び」行為も、ある保育者には「望ましい」と評価され、別の保育者には「望ましくない」と評価される場合がある。同一の保育者であっても、状況の文脈によって、同様の行為に全く反対の評価をする場合もある。

### 「遊び」を捉えること

ところで、幼児教育において子どもの「遊び」を捉えることとは、外部的な客観的事実から、ある子どもが「遊んでいる」「遊んでいない」などと判断することだけではない。一人ひとりの子どもがそこでどのような経験をしているのかを全体的に捉えることが求め

られているのであり、その上で、保育者は子どもの活動に教育的な評価をし、援助につなげているのである。保育者の子どもの捉えが、後に続く評価・援助の根拠ともなる。

よって、子どもの「遊び」を適切に評価し援助する上でも、保育者は子どもの「遊び」経験を適切に理解することが必要であるといえる。しかし、「遊び」にまつわるさまざまな前反省的な教育理念が、適切な「遊び」理解を妨げる場合があるように思う。「望ましい『遊び』」・「望ましくない『遊び』」という「遊び」に対する判断も、一見、教育的な知見からの評価に見えるが、子どもの経験に真摯に対峙しようとせず、子どもを無視した独り善がりの判断になってしまいう場合もあるのではないか。

このような考えをもつに至ったのは、私自身の数多くの「遊び」理解の失敗からである。

印象的な事例が一つある。その事例に出合ったのは、私が大学三年になり、幼稚園の観察実習に入り始

めてすぐの頃であった。その頃の私は、保育や子どもに関する文献を読んではいたが、実際に子どもと定期的にかかわることや観察する機会はもっていないかった。その時に子どもに関して有していた知識は、保育実践や目の前の子どもから得られたものではなく、ステレオタイプ的な一般的知識や、基礎的な学問的知識のみであり、それらの知識と自分の子ども頃の経験から認識の枠組みをつくり上げていたように思う。「一人ひとりの子どもの経験を理解する」とことは一体どういう営みであるのかについても深く考えることはなかった。

そんな中、ある「遊び」に出合った。

五歳児の男児三人が「ポケモンごっこしようぜ！」と言って、紙にゲームボーイの画面を描き出した。そして、二人がその紙を持って向かい合って座り、二人の間にもう一人が座った。一人の男児が「カビゴンの攻撃！ピ！」とゲームボーイのボタンを押す電子音をつけて、実際のゲーム画面に出てくるのであろう言

葉を發する。すると、間に座っている男児が、「効果はいまいちだー」と言う。次にもう一人の男児が「サnderの攻撃！ ピー！」とボタンを押す真似をしてやり返すと、再び、間に座っている男児が「効果はバツグンだー！」と言う。男児三人はその後も、以上のようなやり取りを繰り返していたのである。

私は驚いた。当時の私自身の「遊び」レパートリーには、この「ポケモンごっこ」のような「遊び」は含まれていなかった。「ごっこ遊び」とは、子どもが自分とは違う役割を演じ、虚構の世界を創造し、ストーリーを展開していくものであると思ひ込んでいた。もし、男児自身が、モンスターやアニメに出てくるモンスターと共に戦う人間の役割を演じ、戦いでもしていれば特に気には留めなかったであろう。しかし、この「ポケモンごっこ」は、当時私が思っていた「ごっこ遊び」の範疇を超えた「ごっこ遊び」であった。

私は、「これはごっこ遊びといえるのか？」「現実のゲームボーイで遊ぶ様子をそのまま模倣するだけで、

創造性もない！」などと、否定的にこの「遊び」を捉えた。また、「メディアによる子どもの相互行為の希薄化が、このような形で遊びにまで影響を及ぼしている！」などと、お決まりのメディア悪影響論をもち出したりもした。

しかし、その後、「これはごっこ遊びなのか？」という疑問から、この事例と腰を据えて向き合う中、様々な子どもや「遊び」、多くの示唆を与えてくれる文献と出会い、一年後にはこの事例の捉えも大きく変化することとなった。

まず、私自身の「遊び」を捉える認識の枠組みが非常に狭く、偏っていたことに気づかされた。「ごっこ遊び」についても、想像やイメージ、象徴や創造力といった概念に捉われすぎていた。それは同時に、子どもの「遊び」に出合ったときに、その「遊び」において子どもがどのような経験をしているかを捉えようと思わず、わずかな客観的材料から、単純にその「遊び」を「望ましい」「望ましくない」と判断し、それが一

種の保育的・教育的判断であると思ひ込んでいた事への反省にもつながり、これまでの観察態度を見直すきっかけともなった。

この事例の男児らは、大変楽しそうであった。それなのに、なぜ、「お、新しい遊び方だな！ おもしろそうだな」と当時の私は思わなかったのであろうか。男児らがこの「遊び」でどのような世界を経験しているのか、どこにおもしろさを感じ、何に惹かれているのか、なぜ知ろうとしなかったのだろうか。このような態度で「遊び」を捉えようとしていたならば、男児らの「遊ぶ」世界にこつそりとお邪魔して、その豊かな世界を共有することも可能だったかもしれないと思うと、非常に残念である。

### 「遊び」を評価すること

もし、「望ましい『遊び』」と「望ましくない『遊び』」の差異が、「望ましい」と感じるか「望ましくない」と感じるかといった、単純に大人の認識の違いの

みで語られるものであるならば、この二つの区分は、子どもの経験を見無視したものになる。この事例での当初の私の捉えは、この誤りを犯していたといえる。

当然ながら、保育現場という教育の場において「遊び」を捉えるわけであるから、一人ひとりの育ちと照らし合わせて、その時期にふさわしい「遊び」について考えるのは然るべきであろう。保育現場における「遊び」が「何でもアリ」の無法状態であってはならず、そこに何かしらの教育的配慮がなされて初めて、「遊び」を通しての教育」という幼児教育の理念が達成されるのだといえる。

しかし、ある「遊び」を教育的に「望ましい」「望ましくない」と評価することは、子どもがそこで何を体験しているか、子どもがそこでどのような世界を生きているのかを適切に捉えられて初めて、教育的な意義が生まれる行為ではないか。さらにいえば、子どもの経験をまず認めようとするならば、「望ましい」「望ましくない」という単純な二者択一では「遊び」

は評価できないはずである。子どもの「遊ぶ」経験そのものは、本来的には、一義的に良し悪しで評価される類のものではない。

子どもの「遊び」に真摯に向き

合い、「遊び」について考えようとするならば、保育実践においても研究においても、客観的に子どもの行為を眺めて、「遊んでいる」「遊んでいない」「望ましい」「望ましくない」等と評価するのではなく、子どもの「遊ぶ」世界にお邪魔して、子どもが経験している世界を共有することから始められるべきではないだろうか。

### 幼児教育における「遊び」を問う

しかし、「望ましい」「遊び」「望ましくない」「遊び」といった、「遊び」にまつわる大人側の教育的理念は、われわれが考えているよりも強固なものであり、われわれの認識に強い影響を及ぼしているように



思う。「遊び」とはこういうものだ」「こういう「遊び」はよくない」という思いは、誰しも前反省的に抱いているものである。たとえば、長く続いたり、大きな展開を見せる「遊び」には、ポジティブ・ラベルを貼るであろうし、逆に、長く続かず、次々と別の「遊び」に移行してしまう場合には、ネガティブ・ラベルを貼りがちである。大勢の仲間での一つの目標に向っていくような「遊び」にはポジティブ・ラベルが貼られるであろうし、逆に一人でする「遊び」や、すぐにケンカが始まり崩壊してしまうような「遊び」は、五歳ともなればネガティブ・ラベルが貼られることも多からう。

このような、「遊び」に対して日常的に行っている教育的判断の正誤について議論したいわけではない。普段はとりわけ改めて考えることのない、幼児教育における「遊び」の自明性に目を向けることが重要ではないだろうかと思うのである。

ある幼稚園の研究会で「遊び」がテーマであった時

に、ある保育者の方が、「『遊び』は難しいのよね。人によっても違うしね」と、帰り際に私におっしゃった言葉が強く印象に残っている。幼児教育において、「遊び」は、最も身近で日常的に行われている活動であるのに、今なお、それをテーマとして取り上げ語ることは、保育者にとっても「難しい」営みであるようだ。

「遊び」という言葉は、幼児教育にまつわる場において頻繁に用いられる。「遊び」が幼児教育において非常に重要な位置を占めているのであるから当然ではある。しかし、われわれは、あまりにも気楽に、そして不用意に、「遊び」という言葉を用いてきたのではないか。

幼小連携の重要性が叫ばれる昨今において、小学校以上の「学び」につなげるという視点から、幼児教育の「遊び」を捉え直すという動きは活発である。しかし、「学び」ではなく、「遊び」という言葉でしか語られないもの、「遊び」でしかできない経験もあるよ

うに思う。幼児教育においては、「遊び」という行為がありふれた、あまりにも当たり前のものであったために、これまで反省的に捉えられてこず、「遊び」そのものの独自性が精確に論じられてこなかったように思われる。

子どもにとって「遊ぶこと」とは何か、幼児教育において「遊び」はどのような意義があるのか等、根本的な命題を、ここで改めて問い直す必要性があるのではないだろうか。そのためには、子どもが「遊ぶ」という事象に立ち戻り、そこで子どもがどのような経験をしているのかについて、緻密な記述と探求が必要となるであろう。そのような試みは、幼児教育そのものの独自性を明確にする試みともなると考える。

私自身は、「遊び」という大きな波に飲み込まれ、今にも溺れそうである。大きな渦に巻き込まれ、もげばもげくほど抜け出せない。まだまだ陸地は見えないが、辿りつく方法を探しつつ、しばらく海原をさまよっていいよと思う。

(お茶の水女子大学)